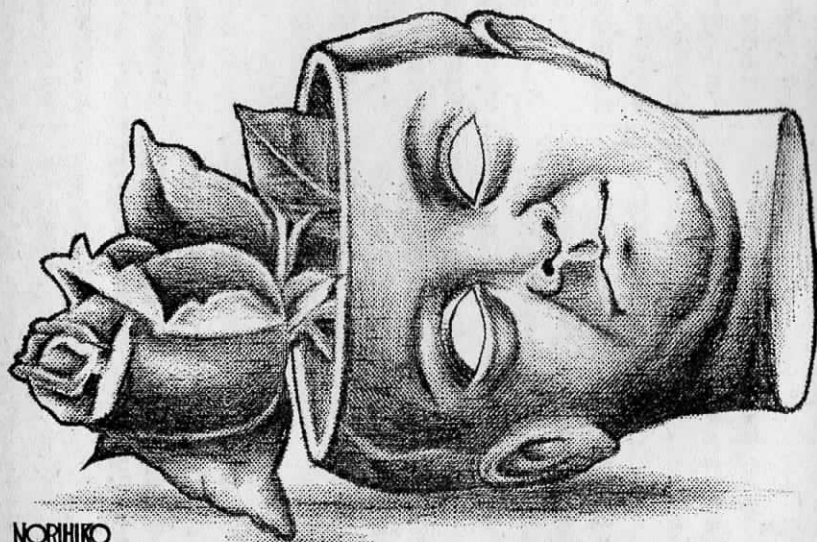


# 重症児・その生を受けとめる

加藤次郎



NORIHORO

要するに疲れ切った自分から蘇りたかったのだろう。勤めるあてもなく、ただ少女じみた憧れで、京都に住みたくなったという同僚が、明日にも旅立つという日の朝、ぼくに、さして長くない手紙を渡していった。もう半年あまりもまえのことである。受け取ってから時を経ずして、ぼくはその手紙を読んだはずだが、気にもとめず机にしまいこんでしまった。

そしてつい先日、ぼくもその職場を辞し、そこでの体験に思いをめぐらす時を持つことにした。さまざまな想念が行き交う。想念とは「まとまり」を拒むものだろうか。あまり自分に引きつけられれば事実を歪め、客観に重きを置けば論文めいて味気ない。

机置く部屋の窓辺に舞う小雪を、眺めるともなく眺めながら、想念との自問自答に日々を過ごしていると、書き置いて行った同僚の文の一節が、彼方からよみがえってくる。

「すべての母親はCPを妬め！」

「CP」とは脳性小児麻痺の略称である。

あまりに高すぎる音声が聞き取れず、強すぎる光が目にはいらぬように、人間の感覚は適温を越えた情報を拒否する。

ぼくが同僚の文を、いちおう読みながら、

内面に刻みつけることなく、机にしまい込んだのも、思えば「すべての母親はCPを妊娠め」、その呪詛にも似た、ぼくには重すぎる思いに耐え切れないことの反射的拒否反応ではなかったらうか。

同僚の投げかけを机にしまおうのはよそう。同僚の投げかけに向き会わずして、ぼくの進む道はないのだから。

1

絵画芸術にほとんど関心がなく、異国からおとされる著名な画家の作品でさえ、見たいとも思わぬ無教養なぼくだが、画家がひたすら探究の進み行き着く「美」の対象が、生まれて間もない子どもを抱く母親の、えも言えぬまなざしとその姿である、という。

ヨーロッパの、宗教寺院はもちろん、片田舎の路傍でさえ、名も知れぬ人の手によるマリア像が、夥しく現存し、地域に生きる人々の「祈り」の対象になっていると聞く。そしてまた、わが国の町はずれにも、車の排気ガスにまみれながら、石彫りの観音像が、無言で息づいているのを通りすがりに見かける。嬰兒の行く末を思い、みつめいる母のまなざし

しは、人間の歴史のはじまりから今日まで、変わらぬ美の象徴であり、かくあれかし、と祈る対象であったのだらう。

子どもを産んだばかりの母親が、その感動をノートに書きとめた。母親の感動がほとばしるそのノートから「生誕の原理」を考えはじめた野本三吉氏の気持がいまのぼくには自然に溶け込む。(道「73年10月号」)

「二月二十五日

午前十時〇三分、出産。体重三二〇グラム、身長五〇センチ。へその緒をぐるぐる首に巻きつけ一時心音が弱まるが、無事産声をあげる。涙が出てくる。

三月二日

むつきを交換し、母乳をやってみるが、未来(赤坊の名前・野本注)が乳首をくわえることができない。必死になって乳房に喰いついてくる様がいじらしく、私も必死。汗だく。

未来は私の腕の中にあきらかに在る。私以上に、そこに在る未来。

三月八日

陽が傾きはじめ、なんとなくテレながら子守り歌を歌ってみるが、なぜか涙が出る

痴れることはできない。

「すべての母親はCPを妊娠め」

その声が、ぼくの「感動のシンフォニー」をびたりと止める。

2

ぼくたちは、行政的に言えば、知能指数35以下、それに加え身体に重度の障害を持つ、いわゆる「重症心身障害児」を集めた福祉施設につとめていた。つとめていた、というより、重症児たちと一緒に生活していた、というより美感の方がふさわしい。

さまざまな病気の子どもがいた。その多くが先天性のCP、つまり脳性小児麻痺であった。頭の中に脳脊髄液が溜る「水頭症」の児がいた。幼児期から少しも脳が発育しない「小頭症」の児がいた。あるいは生まれたとき健康だったが脳炎をこじらせ後遺症を引き受けてしまった子どもたちもいた。月日とともに筋肉の力が萎え縮む筋ジストロフィーの子どももいた。そういう現代医学を持ってしても永遠に治ることのできない病気を抱え込んで生きる子どもたちがいた。

健康な子どもであつたら、生まれて間もなく

く外せるおむつが、自律神経が機能せず二十歳を過ぎても外せぬ児らも多かった。排泄した便を玩具に遊ぶことにも抵抗がなかった。K子ちゃんの面会に訪れた帰りのお母さんと、もよりの私鉄駅で偶然会ったのは、昼間の暖かさが懐しく感じられる頃だから、多分十月だったらうか。

自分が生んだ子どもでありながら、自分の家で生活させることのできない、そんなK子ちゃんと生活を共にしている施設職員だと思っただらうか、お母さんは、乗り合せた電車のなかで、ぼくにこころやすく話しかけてきた。

「K子はね、生まれたときは、何ともなかったんですよ。ふたつをちよっとすぎたころでしたね。風邪をこじらせましてね。熱が下がらないんですよ。お医者さんに来てもらって何本も注射うってもらったんですよ、それでもやっぱり熱が下がりがきらず、とうとう後遺症として残る、今の医学の力ではどうしようもない、と医者に言われたときは呆然としましたよ。」

このまま育てていっても、みんなから馬鹿と笑われるつらさを思えば、いっそのこと、この子とふたりで死んでしまおうかと

できて不覚。

未来、早く大きくなれ。

一緒に散歩に行こう。

一緒にころげ回ろう。

一緒に旅をしよう。

一緒に探そう。

〔未来誕生のノート〕(山幸子)

「未来くん、しっかり生きろよ。おかあさんを大事にするんだぞ」ぼくは心の中で、そう励ましてしまう。

へふふうのおとなにおいて——純粋な生きるよろこびが一ばんあざやかにあらわれるのは、初めての子を生んだ直後の母親の、存在の根底からふきあがるような喜びである。——何か不幸な事情でもない限り、みどり児に見ている母親の眼ほど未来と生命へのそぼくな信頼にあふれているものはない。

と、生きがい調査をおこなった神谷美恵子さんは結論づけている。(みすず書房「生きがいについて」)

未来くん誕生の感動と、生きがい調査との見事な重なり、ぼくはおどろく。

だがぼくは、もはや「生誕の讃歌」に酔い

思いつめ、夜もおちおち眠れませんでした。本気で、「死のう」と思いました。

その頃、お父さんとよく話したものです。どうせなら、あの時治り切らず、死んでくれれば……その方がこの子にとっても、よほどしあわせじゃなかったらうか、と」

K子ちゃんのお母さんも、それまでは、むろん未来くんのおかあさんと同じように

「K子、早く大きくなれ。」

一緒に散歩に行こう。

一緒にころげ回ろう。

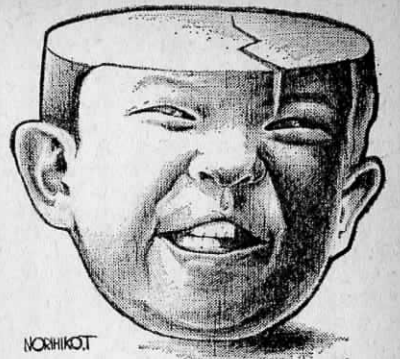
一緒に旅をしよう。

一緒に探そう。」

そう願ひ、わが子の成育に夢ふくらませ、一日一日を喜々として過ごしたことだらう。そして、抱いたK子ちゃんを乳首に含ませているときのまなざし、それは嬰兒キリストを抱くマリアのまなざしにも似ていたにちがいない。

罹病後のK子ちゃんをみつめるまなざしを想像することは、礼を欠くだらうか。

ぼくは、嬰兒キリストが、CPつまり脳性小児麻痺として生まれていたら、その時のマリアのまなざしは……と想像したい。受難の



憂いに一層、美が高まるのだろうか。それとも困惑のため、眉根が近寄り、美は壊れてしまふのだろうか。

スプーンすら手で持てず、排尿排便の訴えも出来ず、衣服の着脱も他者に依存するキリスト。おむつに排泄したウンチをこね回すキリスト。——そんな馬鹿な、と笑うことなく想像すべきである。宗教に疎いぼくだから、キリストが神の使徒であるか、処女懐胎であるかは、知る由もないが、彼が人間であるなら脳性小児麻痺として生まれなかったことは偶然に過ぎないのだ。つまり、脳生理学的に「人間」であるなら、脳性小児麻痺の受難を

とするのは、自分の個性を伸ばしてくれるに有益な先達と、切磋琢磨してくれる友人であった。有益でない他者と関係することは、時間の浪費であり、自己の成長にとっての停滞であり怠慢と見做された。

この「近代自立主義」は、まさにぼく自身でもあった。いまぼくの中で、その「信仰」はかなりの震度で揺らぎはじめている。なぜか。

ぼくは重症児という人間存在を見てしまった。いや「見てしまった」と言っただけは、関係の濃度を表現し切れない。一日たりとも降ろすことのできない脳性小児麻痺という受苦を背負って生まれ、そして生きる人間のいのちがぼくの中を脈搏している、と言えはいくらか実感に近くなる。いやもっと言いたい。もはや、ぼくはつい先日まで共に生活してきたこともたちの「生」を考えずに自分の生き方を探し求めることはできないのだ。

「近代自立主義」の立場で考えれば、ぼくにあって重症児たちは、ぼくの「自立」に何の利益もたらさないばかりか、かえって足手まといの人間ということになる。

繰返せば、彼らは食事、排泄、被服の着脱

背負って生まれてきても驚くにあたらない。医学が発病の因果をはっきりと証明できるまでは、その想像の効力は失せない。

むしろ「キリスト」を「天皇」と置き換えてもいい。マルクスやソクラテスを想像しても同じことだ。むしろ「自分」と置き換えて想像することの方が、よほど大切だ。

3

ぼくらは、偉人を尊敬し、名もない凡人を軽蔑してきた。偉人の言行に心傾け、模倣し同化を志向することによって、自分の救いを求めてきた。凡人は名もないがゆえに、視角から消えてしまった。偉人の教えを学ぶことが、自分を高めることにつながる、と考えがちであった。

つまり「偉人」を正、「凡人」を負にとつた「Y軸」の上昇志向を「よりよく生きる」と呼んできた。

この「Y軸上昇思考」でいけば、肉親の顔すら判別の困難な重症児たちは「負」の極点に位置され、

「あんな人間にだけはなるなよ」と比較して、見下されることになる。

といった人間のもっとも基礎的機能すら他者の手をわずらわす、「自立」から、もっとも遠い人間である。ぼくは仮りに彼ら（のような人間存在）を「他立人間」と呼ぶことにする。「他立人間」は「自立（志向）人間」にとつて、足手まといの厄介者なのか。永遠に他者の保護なしに生きることのできない「他立人間」は、生きる価値はないのか。

4

K子ちゃんのお母さんは、さらに話しつつけた。

「K子の兄がわたしによく言うんです。おかあさん、K子のことを忘れたら、おかあさんは救われないよ、って。——いま思えば、あの子を死なせないでほんとによかったと思えますよ」

K子ちゃんという人間存在の生を引き受けたい心の坐りが「ほんとによかった」という救済実感と呼び寄せているのではあるまいか。一般化して言えば「他立人間」が「自立人間」を救済した、わけだ。

大江健三郎氏が、脳ヘルニアの赤ん坊を生

思えば、少年の頃、近所に年の頃同じくらいのダウン症候群のこともがいた。いまでも九州にいる母親によく注意されたものだ。

「じろちゃん、あんひとあそぶとでけんよ。うつりでもしたら、おおごとやけんね」学校に通うことも、一緒に「缶蹴り」して遊ぶこともできない彼を、ぼくはあたくも存在しないが如く、無視して原っぱを駆けめぐっていた。間もなく亡くなったのを聞いた。今になっては名前すら思い出せぬ彼だが、友だちから除外してしまったことが悔まれてならぬ。「ごめんね」と謝りたい。もし「時」が戻せるものなら、彼の好きな遊びにとっぴりと陽が落ちるまでつき合っていたい、と思う。

ほかならぬぼく自身「Y軸」の上昇をひたすら志向してきたようだ。

いまま少し、別の角度から考えてみたい。

「近代」以降を生きる我々に課せられた命題は「自我の確立」「自己形成」であり、換言すれば「自立」であった。他者に依存せず、自分の拠り所は自分で探求し、自己努力によってそれを確固としてゆく。他者に寄りかか

んでしまった父親の、狼狽から退廃そして蘇生までを文学にした『個人的な体験』で言いたかったことも、結局そういうことのようにだ。はじめ立てた嬰兒殺しの計画を、翻えしてしまふ父親に、彼の愛人（母親ではない）は、「手術して赤ちゃんの生命を救ったとしてもそれがなにになるの？」鳥（父親の愛称——加藤注）。かれは植物的な存在でしかないといったでしよう？ あなたは自分自身を不幸にするばかりか、この世界にとってまったく無意味な存在をひとつ生きたるのびさせることになるだけよ。それが赤ちゃんのためだとも考えるの？ 鳥

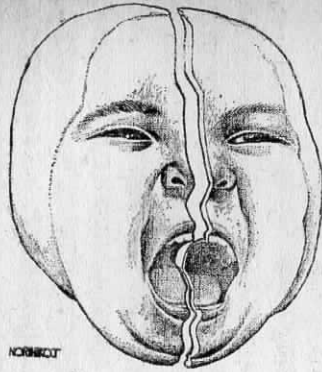
と、父親の心変りに、逆らう。そのとき父親は愛人に、きっぱりした口調でこう答える。「それはぼく自身のためだ。ぼくが逃げまわりつづける男であることを止めるためだ」（傍点——加藤）

K子ちゃんを育てる決心によってお母さん自身が救われ、「鳥」は「ぼく自身のため」に嬰兒の運命に立ち向かおう、というのだ。ぼくは、ここに曙光を見る思いがする。

「植物的な存在でしかない」かどうか、「この世界にとってまったく無意味」か否かを考え、それによって、その児の「生と死」を判

断することは、運命に対する冒瀆ではあるまいか。所与の運命を選択したり、利益不利益を判断できる自由権は人間にはない。(むろん水俣病に代表されるような「政治苦」の場合、政治に立ち向かうベクトルが必要だが)

運命から逃避しようとする人間が退廃と苦悩の淵に陥り、運命を引き受け、立ち向かう人間が救済される、この関係構造は、大切な生きのびさせて、こども自身がしあわせかどうかの問題ではなく、おとな自身の苦悩か救済か、の問題なのである。「他立人間」を引



き受けることによって、「自立人間」が救済される「回路」が通じたことを意味してはいないか。

5

ほくが重症児と生活を共にして感じたことは、彼らは他者の手を多く必要とするこどもたちであり、どんなに躍気になって保育の働きかけを加えても身のまわりのことが自分の力のできるようにはなるまい(近づくことはできても)。つまり「他立人間」で一生を終らざるをえないだろう。しかし、彼らは「他立人間」であつたとしても、決して「非人間」ではない、ということだ。排尿の訴えもできない重症児たちを、しばしば人は、植物人間と呼びがちである。ほくは「否」と答える。それは生活を共にしてみればわかることだ。

さきほど引用した小説の台詞で、父親の愛人は

「かれ(嬰兒―加藤注)は、植物的な存在でしかないといったでしょう?」

と疑問の形をとりながらも、相手の同意を求めているが、いまのほくなら、生まれたて

たしかに重症児は成人以前の発達段階を越えることはむずかしい。しかし重症児には重症児なりの生きがいというものが、間違いなく存在することも知つた。喜びもあれば悲しみもおとずれる。こども同士の愛憎も生まれる。これを、どうして「植物人間」と呼べよう。

昼間、保育室で遊んでいるこどもたちは夕食後、ベッドに帰る。いつも間もなく寝入って朝まで起きないS夫君を、夜八時頃悪いとためらいながらそっと起し、耳元にささやいた。

「S夫くん、聞いているか。こんどね、かとうさんね、とおいとこ、いっちゃうんだよ」

「とおい、とこ、いっちゃ、うのオ」  
馴れるまでは、はなはだ聞き取りにくい独特の抑揚で彼はそういった。

「そうだよ、とおい、とこ、いっちゃ、うんだよ」

抑揚を真似て、ほくはこたえた。

「どこ、とおい、とこって」  
「S夫くん、しらない、とこだよ。――よし、もうねような、S夫くん」

そういって布団をかぶせ、ベッドをはなれ

た。寝つきのよい彼のことだから、てっきり眠つたものだと思つていたところ、一時間ばかりたつて、ふとのぞいてみると、パッチリと目を開けているではないか。  
「なんだ、まだ、おきてたのか」  
「かと、さん、とおい、とこ、イッチャダメ」  
視力ゼロの彼が、うす暗がりの中を、ほくの手を探しはじめた。彼が一時間あまりも眠らず考えていたことがいじらしくてならず、  
「うそだよ、S夫くん、かと、さん、とおい、とこ、いかないよ、とおい、とこ、いかないから、さあ、ねよう」  
と嘘をついて、なだめた。彼は安心したのか、目を閉じた。不覚にも涙を滲ませてしまったほくは、しばらく同僚の勤務室へ戻れなかつた。

6

重症児を取材したジャーナリズムは、しばしば「生ける人形」と名付け「この世の悲惨」と形容する。あえて反論すまい。通りすがりの取材者の目にそう映つたのなら、それもまた「真実」と言えるのだから。

の段階で「植物的な存在」かどうかを判断することは早計である、と反論したい。どんなに重症のこどもでも人間的な感情が絶対に、「無」でないことを知っているからだ。脳の主要な部分が損なわれ、神経及び上下肢などが運動しなくとも、残された部分がわずかながらも機能し、外界からの情報に対し、自分なりに反応するとするなら、それはその見と外界との「関係のはじまり」と受けとめ、その反応をそつと両手で抑うべきだ。  
たとえば、おむつに排泄した便をこねまわす児がいたとする(現に少なからずいた)。われわれ職員にとっては、はなはだ困つたことなのだが、それをやる本人にしてみれば、不快感の表現であり、ある場合には玩具の代用とも考えられる。すなわち人間的感情の表現であり遊戯行為なのである。

〈子供にとっては「あそび」こそ全人格な活動であり、真の仕事、すなわち天職なのであるから、そこで味わうよろこびこそ子供の最大の生きがい感であろう〉  
(前掲書「生きがいについて」)  
一生、他者に依存せずには生きえぬこどもだから「しあわせでない」とは言い切れない。

ほくがいま「とおい、とこ」へ来、自分と重症児との関係のありように思いを沈めると、ほくの想念に彩られた重症児のイメージが「悲惨」ではなく「優しさ」であるのに気付く。

資本主義の利潤欲望に塗り固められ、化石と化してしまつた人間と、二十歳になつてもおむつを外せぬS夫くんと、いったいどちらが人間的であるか。人間の絆をしつかりと結び合えるのはどちらか。あえて答えの必要はあるまい。

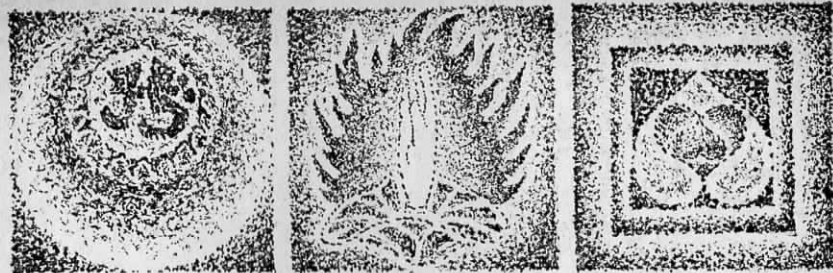
いささか蛇足めくが、ほくは近く、異性とともに「生の道」を歩きはじめた。いつの日か、第三のいのちが芽生えはじめることだろう。たとえどのような嬰兒であろうと、もはや、ためらいも狼狽もしない。与えられた運命に立ち向うだけである。

このあいだ京都近くの重症児施設で働きはじめたと便りを寄せた、例の同僚に、このことを書いて送らう。

(投稿)  
(イラスト・高橋矩彦)

# 個人的終末

阿部 昭



世界の終末も、人類の破滅も、私人の個人的消滅にくらべたら、物の数ではない。

昭和三年に肺病で死んだ私小説の権化、葛西善蔵は、死の前日に、自分の重態を報ずる新聞記事に丁寧に目を通して、「割合によく書けてる」と批評したそうだ。臨終の際には、「切符、切符」と呟いたという。汽車でどこかへ出かけるつもりだったらしい。

まさに死なんとする葛西善蔵に文章を褒められた新聞記者は、鼻を高くしていいであろう。葛西としては、出来ることなら、自分の死亡記事にも一応目を通してから息を引き取りたかったらと思うが、それは間に合わなかった。

しかし、だから葛西は偉かったとは思わない。物書きなら、それぐらいの心意気は当然見せ

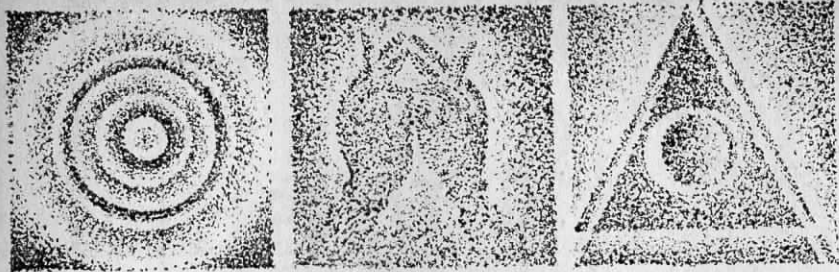
てしかるべきである。一生原稿用紙や活字と鼻をつき合わせて暮らしてきたのだから、最後に回されてきた切り抜きやゲラの一つや二つ、ちゃんと見て置くのは職業的義務でもある。

葛西善蔵を嗤う人間もいるかもしれないが、どんな死に方だろうと、それにケチをつけるわけに行かないのは、死者の絶対の特権、生者の無限の弱味であるようだ。あの三島由紀夫の死にざま、あれがどうにも気に食わないと私は言ってみるけれども、当人にしてみれば、かく言う私のような人間も含めて、(まア、これを見るがいいヤ)として見せたのだから、見せつけられた口惜しさだけは消えるものではない。十階のビルの屋上から身投げをして、落下して行きながら、途中でもまだダイビングのフォームを気にしてい

るようなあの死に方、あそこにも右の葛西式の批評精神がないとは言えない。

葛西の心意気、三島のシャレは、人類を相手とった批評である。シャレとは、上から下までリュウとした服装で人前に現われて、(まア、この俺を見ろやい)と言うことでもあるが、ついでに(お前らのその形態は一体何だ)と言っているのでもある。まわりが全部気に入らぬ。大げさに言えば、世界の否定である。そして、いやしくも批評であるからには、時に批評もするなどという中途半端では仕方がない。そんなのは批評でも何でもない。

したがって、数あるシャレの中でも、死ぬことぐらいのシャレはなく、批評もないということになる。物を書くことは、元来非常に死ぬことに似ている。



書いたものは、その都度の遺言であり、書いた人間はそのつとに死ぬかのようなものである。ただ、しょっちゅう死ぬふりばかりして、ろくなものは書けないから、また一から書くにすぎない。

人から伝え聞いたところでは、死の床に身を横たえた志賀直哉も、シャレは忘れなかったらしい。家人に便瓶で尿を取ってもらいながら、口だけは動かしてこの老大家は言ったそうだ――

「昔はよく作品を褒められたもんだが、今じゃ褒められるのは小便の色だけだ。」

志賀直哉のように一生批評家を馬鹿にし通した人間でも、批評されたことだけは覚えており、この期に及んでも、小便にかこつけて批評を見返すことを忘れなかったのである。死に臨んでのこの人類へのいまいましき、世界を見下したような笑いには、なにか感動的なものがある

るではないか。

身のまわりで起こる死を望見していて、いままらのように驚かれるのは、死ぬのには資格も才能も要らないらしいということである。人間が出来ていないので、どうしても死ねないでいるという話は聞いたこともない。皆ちゃんとして死んでいるようなのだ。これを以てしても、死が生よりも一段下等のものであることが了解される。

軍人だったおやじが癌にかかって、余命いくばくもないと知らされた時、私は心配であった。おやじはあれでうまく死ぬのかしらん、とそればかりが心配だった。うまくやってくれろといいたいが、いままら考えるとおかしいが、私はその頃は、まだ、死ぬ、死ぬは人による、と思っていた。私はおやじを死ねない組に入れていたのだ。だから、これはいかん、と気を揉んだのである。しかし、結果は、案ずるより産むが易

し、というよりなものだった。そして、これなら俺もなんとか死ぬかもしれないという気がした。父親の死が息子を批評したというべきであろう。

人間が死なねばならぬという事実から、ただちに虚無だとか絶望だとかいう結論を引き出す奴は、思慮の足りない浅暮な連中ばかりである。人間が虫やけだもののように黙って消滅すると思ったら、大間違いだ。ただ死ぬのではない、どんな場合でも、人は何者かのために死んでやるのであり、死んで見せるのであり、生き残った側からすれば、死なれる、(畜生、死にやがった……)ということなのだ。全人類全世界に対する批評の切り札。

思えば、うるさいことだ。最後の最後まで、ああだこうだと、そうぞうしいことだ。人間、ほんとに虚無なら、むしろノンキなものであろう。

(絵・前田常作)